

病児保育奮闘記

(10)

子どもサポート H&K
大石 仁美

箱庭の効用

私は20年ほど前に、知人から箱庭のおもちゃを譲り受けて以来、旅先などで使えるものを見つけては、少しずつ買い足してきました。箱は家具屋さんに特注し、箱の下は引き出しの整理ダンスにして、中を小分け出来るようにしています。

我が家のプレイルームにおいて、蓋をして普段は文具を置いたり、花瓶を置いたり、来客時には茶器をおいたりと便利に使っています。

学校勤務していた時に、当時の学校カウンセラーに少し手ほどきを受けた程度の全くの素人ですが、無口な私には性に合っているようで、(六口でしょとからかう人もいますが) 叱嗟に適切な言葉が出てこない、語彙の少ない私にとって、感覚的であるにしても、この上なく心に響くコミュニケーションの手段になっているのです。

子どもの相談では、私と同じように自分の心の内を思うように話せない子どもの心を覗き見る方法として箱庭をつかっています。心理の専門家ではないので分析など出来ませんが、またしてはいけないと思いますが、それは本当にストレートに

届く会話として私の心に入ってくるのです。

私が箱庭を使う目的は、そこに表現された世界を見ることで、子どもと親に寄り添えるヒントが見つかるからです。

何が起きているの？

どうしてこうなっているの？

なぜこんなにしんどいの？

親から話を聞いた後に、日を改めて子どもに箱庭をしてもらいます。その箱庭をあとで親と一緒に眺めるのです。事実をとらえて現実を知る。それはある意味とても辛い作業です。そうして子どもの心に触れた時、その叫びは、細く鋭い刃になって大人の心を貫きます。その痛みをグッとこらえて受け止められるかどうか、泣きながら受け止められた親は前向きに歩み始め、子どもは救われます。でも、子どもの心が分かったからといって、親が子供を受け入れるとは限りません。頭で理解しているように見えても心が受け入れない。私が出来るのはここまでで、そのような親に対しては、引き続き児相などの専門家をお願いするしかあり

ません。

現実を受け止められない親は、専門家のアドバイスも、自分にとって都合のいいことしか頭に入らないことが多いようですので、そうなるともう親子で傷つけあいながら、転がって生きていくより仕方がないのだらうと思います。さみしいですが、それもまた一つの人生。そう割り切ることにしています。

病児保育と子育て相談

病児保育を始めた当初から、子育て相談は二本柱の一つでした。実際一人の子どもにたっぷり時間を取って向き合う時間がありました。児童養護施設の子どもの性教育を担当していましたので、傷ついた子供が、自分の傷を癒すのにどんな行動で表現するのか、まざまざと見せつけられることが多く、それは鈍麻した私の感性を揺さぶるのに十分でした。子どもの行動の意味を、大人に正しく伝えたい！大人に分かってもらいたい！

子育て相談を始めたのは、親のしんどさを汲み取るというよりも、子どものしんどさ、辛さを親に伝えたい、つまり子どもの側に軸足を置いての子育て相談でした。病児保育施設に「子どもサポート」という名をつけたのも、そういう意味があったのでした。

T君のお母さんから電話で依頼があったのは丁度二年前のことです。知人で、不登校の小学三年生をもつお母さんの話を聞いてもらえないかというものでした。母親仲間で地域活動をしているのですが、トラブルが多く浮いているのが気の毒で、どうしてあげたらいいのか気をもんでいるのです。実は、同じようにT君も小学三年生の時に不登校気味で、相談にのったことがあり、その時のことを思い出して電話してこられたように思います。(T君は現在高校三年生。大学受験にむけて猛勉強中。) T君の経過は後ほど述べること

にして、依頼のあったY君とお母さんについてここに記してみようと思います。

Y君の箱庭 (初回)



Y君のお母さんの話では、彼は一歳半検診の時要注意といわれ、二歳の時自閉症スペクトラムと診断されたそうです。その後児相でフォローしてもらっているようですが、子育てがしんどくて、夫との不仲もあり、腹立たしい気持ちでイライラする毎日。親友だと思っていた幼馴染でさえ、陰口を言っていたとわかり、正直、人は内心どう思っているか分からないと思うと、友達づきあいも億劫になりがち。約束していても、気が重く、ドタキャンすることもあったりして、どうしても浮いてしまうらしいのです。夫との離婚も考えていて、手に職をつけようと専門学校に通ったりもしていましたが、人間関係でつまづいてばかり。実家もガタガタして落ち着かず、あまり力になってくれそうもない。以前から人にどう見られているか気になるほうで、相談員に週一回のペースで話を聞いてもらっているけれど、解決の糸口が見つからないとポロポロと涙をこぼされました。

このお母さんの話を聞いていて思ったのは、誰とも信頼関係を築けていないということです。親

友だと思っていた幼なじみとは、幼稚園から短大までずっと一緒だったそうですが、どこの短大ですか？と尋ねると、態度が急にかたくなになり、「それは言えません。人に言えるような学校ではありませんから」という答え。びっくりしました。人に言えない学校、そこに籍を置いていた「自分」って一体何なのでしょう。彼女のしんどさの原点が垣間見えたようで、悲しみと虚しさでいっぱいになりました。日本の教育の歪みが透けて見えたからです。

自分のことが好きではない、自信が持てないというお母さん。次回からはお母さんと Y 君、二人の良いところ探しに時間を使おうと決めました。

上の写真は Y 君が初めてきた日に作った箱庭です。Y 君はかなり多動で、一般のマンションとかなり様子が違うことが不思議らしく(コーポラティブなので)部屋の中をうろうろ探索してからお茶を一杯飲んで、気持ちが落ち着いたところで箱庭に取りかかりました。

よく気が付き、よくしゃべり、態度が大きいかと思えば、反対にどこかおどおどしたところの見られる子でした。

「もっと置こうかなあ。賑やかな方がいいもの。」賑やかなのが好きなのね。「だって淋しいのはイヤだから」そう言いながら自動車を道いっぱいに並べ、建物の上には奇をてらったように目立つミッキーやピエロなどを並べました。それは「僕を見て！」と言っているようでした。柵の囲いの中には動物たちをたくさん並べました。どの動物もみな同じ方向を向いていて、人も同じです。ほぼ等間隔に横並びで、向き合っていません。喧騒の中で、孤独感がひしひしと伝わってくるようです。私は彼のようなタイプの子は、人とかかわらなくても、マイペースで淋しくないのだと思っていました。でも違っていました。どう関わったらいいのか分からなくて、淋しかったのです。また子どもから教えてもらいました。「思い込みを捨て耳を

澄ますこと” 分からないことは本人に聞けばいいのだと。あ〜楽しかった！またやりたい。達成感があった。と言って帰って行った Y 君でした。

期待と不安

Y 君のお母さんは月一回のペースで通ってこられました。毎週相談所に通っているのに、進展しないことの苛立ち。学校では、なんとか別室登校できるようになったけれど、一人で課題をこなしているだけなので、勉強が遅れるというあせりがあるということでした。医者には、「そろそろフリースクールも検討してみてもは」とアドバイスを貰ったようですが、資料をもらっても見学にも行っていない様子。理由をたずねると、「そこは遊び中心のような気がするので。一度見学に行くと行かないかならないようになってしまうのでは、そんな気がして動けません。」という答えでした。

「子どもの成長の土台は遊びですから、楽しく遊べるのが一番。勉強はそのあとだと思いますよ。」すると、お母さんから意外な言葉がとびだしました。「うちの子、知能指数が高いのです。せっかく頭のいい子に生まれているのに、勉強をさせないともったいない。」

「子育てをしんどいと思い、腹立たしく思い、時に捨ててしまいたいとさえ思うのに頑張っているのは、この子は頭のいい特別な子だと思うことで納得しているからです。」

おーう なんとという誤解。知能指数なるものの罪深さ！お母さんに希望を持たせようと伝えたことが、この母子を縛っているなんて。

お母さんの劣等感が、この子を特別な子 (IT 産業でトップを走る人のような) に育て上げることで、優越感に変わる。あのすごい人のお母さんという優越感！そんな幻想を持たせてしまったことが、相談員さんや学校の対応に不満を募らせる原因になっているように思いました

お母さんの悩みは学習だけではありません。子どもの行動を制御出来ないこともその一つでした。ゲームに熱中している子を止められない。暴れて母親の腹をなぐる。飼い猫をいじめる等。そしてまるで奴隷のように母である自分をこき使うというのです。「ん?? 具体的に話してください。」

「たとえば朝食の卵を目玉焼きにしたとします。するとこんなの食べたくないから卵焼きに作り直してというのです。」「で、あなたはどうかされるんですか?」「仕方がないので作り直します。」「なぜ?」「そうしないと好き勝手に自分で作るのです。」「それはダメなのですか?」「後片付けが大変なのです。」

どうもこのお母さんの話を聞いていると、どっと疲れてしまいます。架空の世界に向かって何も持たずに旅をしているような感じです。子育ての方針があるのかなのか分からない。で、こちらにも具体的に提案することにしました。「それは自立へのチャンスじゃないですか。そんな時は子どもに作ってもらいましょうよ。上手くできたら褒める。上手くできなくても、やろうとしたことを褒める。片付けは一緒にしましょう。手伝ってくれてありがとう。助かった、うれしいと伝えましょう。」

こんなふうにお母さんの話をききながら、具体的に褒め方のコツを話し、同時にお母さんをも褒めるよう心掛けました。

「今までかなりしんどい思いをされたでしょう。よく頑張って良い子に育てましたね。」「お母さんは正直な方ですね。」「感性が豊かですね。」「そんなふうに分かる言葉で気持ちを伝えられるなんて、良いですね。」等、褒められた経験がないというお母さんにとっては、褒められることが自己肯定感をとりもどす一つのプロセスだと思います。確かにプライドはもっておられる。それが歪まずに自然に表現できたらどんなにいいでしょう。

「人に助言されても、実行しないことが多いです。やらされているような気がしてしんどくなるのです。」と言っていたお母さん。たぶん、こちらがいくら提案しても、実行はしないよと言っているのでしょう。それでも自分が褒められることは悪い気がしないらしく、積極的に通ってみえました。息子への対応については実行しなかったかもしれませんが、それもいいと思っています。母親自身のなかに自分を愛しく思う気持ちが湧いてきたら、きっと何かが変わるはずですよ。

Y君の箱庭 (7か月後)



この箱庭は、以前行ったことがある田舎の風景を作ってみようと言いながら、短時間で完成させたものです。彼が一番力を入れていたのは川でした。ボートを浮かべ、魚を泳がせ、水鳥をあそばせ、そして、土手に草らしきものと苔むした石を置きました。そして、しきりに「確かにあったはずなのになあ」と呟きながら、おもちゃ箱をかきまわし、「あった!!」と嬉しそうにブロックの一片を置きました。橋が架かったのです。なんだか嬉しくなりました。私は後ろで見守りながら、そうしてくれることを願っていたからです。

「できた?」「うん、落ち着く」
Y君は、緊張を解き崩す術を、自分なりに見つけているようでした。

せながら実践している偉大なママなのです。

Y君を紹介してくれたT君のママですが、今では子育てのしんどいママたちの相談相手になっているようです。T君は私学の特進クラスに在籍している高校生。運動部に所属していても成績はキープしているそうなので、たいしたものです。

「えっ？なにかしたかって？なにもしないこと。宿題忘れるのは当たり前。忘れ物は毎日。紙に書こうが、しるしをつけようが効果なし。持っていけるよう玄関に出しておいても持って行くのを忘れます。電気つけても消しません。消さずに寝て一晩中ついていても、電気代が高くつくのは許容範囲。洋服脱いたら、セミの抜け殻状態で残ります。それがこの子なんだと思って、おもしろがって楽しめます。長時間みているとストレスがたまるので、家にいる時間が少なくて済むようどんどん外で運動してもらってます。」

T君ママの、ちょっと変わった子からこれは大変という気づきは小3の時まつ毛、まゆ毛を全部抜いてしまったことからでした。皆と同じようにすることを求められる、それがこの子にとって大きなストレスになっていると感じたママは、自分から医師に診断書を書いてもらいに行ったのです。他の子と同じようには出来ないということを学校側に分かってもらうために。診断名をつけてもらったことで、席を離れて動き回ったり、国語の時間に絵を描いていても許されるようになり自由度の大きい小学校生活を送ったようです。そして中学、高校へと無事進学。なによりも母親がストレスをためないこと。楽をすることを考える。余計なことをしない。出来ないことを求めない。良いところだけを見てほめて育てる。そして今も、これからも私の愛しい息子であることに変わりはありません。

これですね。大切なこと。T君ママは簡単そうで実は一番難しいことを、自然体で我を浮き沈みさ